

# 武川忠一 百首

## 内藤 明 選



武川忠一

白らじらと光る氷湖の沖解けて倚るべきものに遠く歩めり

ゆずらざるわが狭量を吹きてゆく氷湖の風は雪巻き上げて

父の外に立ちいる決意少年に氷湖は固き風景となる

鬚長き埴輪の爺は泰然と佇ちたり悲歎に眼を閉じて

玉だすきかけし胸のみとどめいる埴輪の乙女乳房ゆたかに

君折りし小梨の花の白々とみどりは浅き五月の山々

何もかもさえぎりて屹つコンクリート壁ダムの斜面の虫光り舞う

放射能に肌ただれしが死者なしと彼ら人間のことを伝える

廊下這う着物の裾は乱しつ誰にもこの母をみられたくなし

「氷湖」

ふるさとに帰りてゆきし幻の無礙自在なる母の呼ぶ声

骨となりし母に寄りくる春の波やすらぎは今かえり来るべし

人間の底光るもの信せんと灯を消しぬともかくも眠らんがため

海埋める泥の堆積きらきらと水のたまりに風紋はたつ

海港と呼ぶには汚れすぎる海重油の流す虹色が寄る

鮮やかに冬のいちごを浮かばせて陶の小皿のみどりは冷ゆる

まぼろしに甦る氷湖の透明とわれとの距離よ遠ざかりゆく

憎しみの確証はかくすがすがと氷室の風のごとき音する

梅雨ぐもり朱によどみいる都心の空重き日本の空に降る雨

「窓冷」

いまのわれの心にしみて灯を消しぬ強きことはぞ自浄というは  
隸属を選びて凍る国の刃に胸さしき孤りつきつめし果て

その手国のいたみに震える青年を宙づりにせし巾旗を立てよ  
われに棲み激つ危きものためひとり夜は鎮花祭はらなすのまつり

水明りひと筋残る冬の川石一つ投げ人もとりくる

あるときは檻樓らんるの心縫わんとしき檻樓らんるの心さらされていよ

ガラス器に浮ぶ水片鳴らす夜かすかなれども固きその音

灯ひのまえに心さらしていたりしがひとりの裸心というはさびしき

若ければ狂に猛りし激情を無様ぶさまにわれも激して憎む

何時いかなる旗にも従つかずとまた思いいよいよ心愉しませずいる

灯の消えし校舎の黒き窓並ぶついに言いきれざりき彼らもわれも

手のひらに転がしている青梅のみどりのかけはわが手に冷ゆる

生きてわが流氓りうまうのところ誘うもの寒の夜を打つ小鼓の音

碧玉のみどりの疵きずによみがえり呪の歌冥き冬野にひびく

忌いの日を長くまもりて戦後ありひとりの夜のわが魂おくり

垂れさがる巾旗の垂手に肩にいまもしたたる冷たき雫

「青釉」

沖にゆく盆燈籠の長き影悔しき生を人は流るる

魂おくりするは生きいるわれならず人の無残は沖にともりて

水明り花のごとくに誘いて夕べの沼は風に乱るる

確実に滅びしものの明るさよ礎石は夏のひかりにほてる

この丘にたちし遠世の歌びとを数えて思う心閉じて思う

冷えこごりやがて凍りし湖のごと思想のごとし冴え冴えとして

越えてきし峠の闇に散るさくら白冴え冴えと流れいるべし

手にとれば指のぬくみの跡くもり白磁の壺の煙のごとし

たまさかに舞いくる雪の夕日かけ家跡にきて遊あそべ父母ちちはは

空かになりし身はかるがると歩みきぬ亡なびしものと遊ぶ家の跡

蘭玉のしなえる枝をかざす母ま白き香き花のまぼろし

亡なき者とわれとのみなる饗宴うたげにて酔いて歌えり昏るる雪原

夕映えの色おとろうる街をゆくあとかたのなきもの一つあれ

人はきて憩やすんでいるや灯ひに染まり黄に照る水の仮象の色に

鋼鉄を張りし路面が夜の雨に鋼はがの冷たきつやを湛たうる

耀きらえる白妙の雪湖ゆきうみの雪ゆきてかえらずなりしまぼろし

「秋照」

日ぐれ道幼きものら摘みためしほたるぶくろに灯のともり来よ

咲うとう古人の佳きことは花のあふるる老木一樹

若々しき群にひとりの白き髪ああ歳月の抜き去りしもの

澄む空の月の光を受け歩むこおろぎの夜の身の影一つ

ひっそりと自壞してゆく石というこの物体の白き月光

緑稜

泥のにごりかかえしままの終焉がおほろのなかにくるときあらん

年ごとに縋れてゆるめるうつし身を覗くまなじり 励まさんとす

靈魂は確かにあると唐突に少年が母にいう声聞ゆ

撓やかに葉ずれの音をたていしが夜の塊となりたる一樹

地の穴を覗く一人がものをいい底より響く低き鋭き声

夕鳥の声の絶えたる村の辻石の仏に蠟の灯ゆるる

どんぐりを拾い数うる童女らと石の仏と唱う日のくれ

爺の手にひかれてゆくはいつの日のわれかや夕べの蒼かけりくる

誰が魂を運びてひかるあきあかね透きとおる夕べの光に

鞭のごと空にひびきて渡りゆくかの冬山の風を恋しむ

浄からぬ身のかかえたるかたまりが坂を転がるなどとおもいき

身体の続きの影が前に伸ぶ棒のごとくにきやかに伸ぶ

切りとられし崖の地層のあざやかに濡れたる肌寒の陽が射す

山にゆかんゆきて五月のあかときの泉を掬まば変若かえるべし

何かまだわからぬものがせめぎ合う身体のいずこ心の位置は

嬰兒は手を拍ち笑う体ゆすり笑い手を拍つ飲食ゆえに

ほろほろに生のぬけたる鉄片を庭に見いでてとりとめもなし

御柱 荒べる魂はたけり墮ちまたすがり乗る人は巨木に

雄たけびの木魂となりて荒ぶ神五月の山は鳴り響みくる

少年の声澄み透る木遣り歌金の御幣のきらきらしもよ

堪えがたく身の乾く夜を自覚めおり離合はいつも罪をともなう

定住といつより決めし定住と決めてふわふわ心ただよう

政治との軋み知りしは遥かなれど憤懣の袋うつろにしほむ

器より溢るる水が感情のごとくきらめく 溢れしめいん

その仮面もはや用なく人は佇ちほればれと酔う貌は何者

断片の雲母流るるみずうみのもう招くなよわが短歌

固きもの尖るもの光るもの描きていしがぐにやぐにやとなる

地層

さすらえる父とゆく野を閉ざしたる白き夕霧われは存らう

眞はだかに放りだされて白妙の雪に埋もるぬらりと身体

雪明りの中をただよいいたりしが汗しとどなる身は目覚めたり

行方しれぬうつし身が見え父が見え春ふる雪に宿らんとする

天よりぞ流らう雪の撩乱にけふる残生ふうわりと見ゆ

存うというはなになる凡庸に狭く苦しみ狭く拒みき

かくのごとくえ処もなき生が有いまふるさとの湖辺に二人

うつしみをぬぎて軽羅の思惟ひとり床に唄うたいおり

するずると抜くどくだみどくだみの音とだ音が臭いを発す

「翔影」

猿に曳かれ年経て帰る白き馬ほれほれと聞き解かりにき

一杯のうま酒まどかに沁みゆけば喉よろこぶその一杯を

古人と心かよえば波立つを支えともしき歌は身力

敵味方ほほけていずれわからなくなる日のあらんわが世紀末

ししむらをつつめる腹の皺みたりかつて腹から憤怒したりき

「もういいよ」と老木の花の紅に呼ばれて確かにもういいよ現身

寄りてまた離れゆきたるたましいの影とも刃とも夕雲の彩

雪の夜の遠き記憶の山の音もう急ぐとも急げぬ時間

一大事などはなけれど体臭も体温も抜かれたましい笑う

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

武川忠一は大正八年に上諏訪に生まれ、のちに離郷して東京の人となった。第一歌集以来、その故郷の象徴として「水

湖」がさまざまな歌われている。そこには、「湖」の変貌して

いく姿が描かれるとともに、「湖」をめぐる世界は作者の生と魂の原郷となっていく。それは武川の原風景であるとともに、

近代化の中で日本人が喪失していった何かであるともいえよう。自らの生に執しながら、意識的に現実をとらえ、人間の存

在の奥を追い求めようとする作者をそこに見ることができ

百首は、武川の七冊の既刊歌集の時間を追った。そこには

戦後五十年の時代や歌の変化や、作者の感情のゆれ動きが、かなり生々しくあらわれている。一人の歌人の物語が立ち上

がって来るが、その時々作者ならではの激しい怒りや嘆き、かなしみやよるこびが、いわば肉声として歌に刻まれている。

決して派手ではないが、魂とでもいべきものが確かに言葉に宿っていることが思われる。

内藤 明（ないとう・あきら）「音」会員